須磨の自然，歴史および文化

― 同じステージで考える ―

大　賀　二　郎*

はじめに

須磨は，先史時代から人類の定着を証拠づける石器がみつかっている。古代においては，摂津国の西の国境としての位置を占め，大和の政権，文化圏にあった。中世以降においては，一の谷合戦を始めとして，歴史の凄絶な舞台となったところである。また源氏物語など詩歌のふるさとであり，絵巻のように展開する物語は，華麗で，かつ，無常感の漂うものであった。

自然史においても，須磨は特筆される地域である。北須磨に拡がる凝灰岩台地は，神戸層群植物化石産地として内外に知られている。地質時代第三紀においては，古神戸湖がこの地方に拡がっていて，暖帯，亜熱帯性のゆたかな植物相を形成していた。

史実を伝える文献も数多く残されている。そのなかで絵図面は興味あるもののひとつである。歴史や物語を題材にしたものが殆んどであるが，間接的に当時の地形，景観，林相，風俗習慣までも描き出している。摂津名所図絵，源平盛衰記図絵，平家物語図絵，摂津国細見大絵図など。のどかな田園風景，漁村の点在する松林，須磨浦の岩壁が海に向って迫るさまなど，鮮やかに描写されている。当時の生物の生息状況をつぶさに記録するものはないが，このような絵図をみると，ゆたかな生物相が想像される。

須磨は，自然資源と歴史的，文化的資源を共有するまちである。風光明美な景観のなかに，新しいものと古いものとが共存している。南部の旧市街地は，重厚なたたずまいのなかに歴史の小径や屋敷林などがあって，いまなお古来の文化の香りを残している。

北須磨は，近年大規模なニュータウンが展開している。整備された住環境，そこには太陽や緑や空間が十分に取り入れられて，未来指向のまちになっている。

自然と開発，これは一般的には相対する概念である。生活環境の拡がりは，世のなかの趨勢であるが，いま自然環境と生活環境は，同じステージで考えられるようになった。両者が共存し，調和することが必要である。

自然と文化は，相互にかかわっているといえる。その視点から須磨のうつりかわりをたどってみよう。

＊須磨区役所副区長（神戸市須磨区中島町1丁目1番1号）

自　然

(1) 地　質

六甲山から横尾山，鉄拐山，鉢伏山などの山稜と山麓にかけて花崗岩質の深成岩が走る。山稜の南部は，主として礫岩層からなる大阪層群で構成されている。

両者の間には須磨断層があり，その線上に礫岩からなる段丘層が点在する。中落合の落合池から垂水区南部市街地にかけて帯状の沖積層がある。

ニュータウンが展開する北須磨には，神戸層群がある。そのうち白川東北部は藍那累層，白川，落合，神の谷地方は白川累層，友が丘，多井畑地方は多井畑累層と地質学上の細分がなされている。

特に白川累層と呼ぶ凝灰岩台地は，植物化石の産地として前述のとおりであるが，1500万年前の第三紀，このあたりには古神戸湖と呼ぶ淡水湖が存在していた。当時火山活動が盛んで，その供給源は定かでないが，大量の火山灰がこの地方に降り続いていた。化石形成の原因となった。

気候は，暖帯，亜熱帯性で豊富な植物相を形成していた。ホワイトオークガシ，ヌマミズキ，ムカシケヤキ，ムカシブナ，メタセコイアなどの森林帯をつくった。この地方の特産種や貴重な球果なども発見されている。堀治三朗氏は，神戸層群植物化石として，約200種を識別されている。

この白川累層の南部は，白川台，落合，神の谷，菅の台などの新しい住宅街が形成されている。立ち並ぶ高層住宅群，ショッピングセンター，病院などまさに隔世の感がある。市営地下鉄名谷駅北の落合池や道路の法面の一部には，凝灰岩層の残るところもある。

白川北部の山伏山神社一帯は，いまなお，古い山村のたたずまいがあり，凝灰岩層の露呈するところが各所にあり，太古の静けさを保っている。

(2) 小動物

哺乳類では，北須磨が開発される以前の鉢伏山，須磨アルプスの山中にはイノシシが，高取山，妙法寺，離宮公園北にかけてはキツネがよく出現していたといわれるが，いまは実存の気配はない。ノウサギは，多井畑，妙法寺地方に，リスは，須磨アルプスの山系にみられる。

鳥類では，四季おりおりの鳥が観察される。須磨の山

間部は，以前は渡り鳥のルートになっていたが，周辺の開発によって，三木，有馬方面に移動しているとみられている。須磨背山で四季を通じて観察される鳥としては，メジロ，カケス，シジュウガラ，カワラヒワ，エナガ，コゲラ，ホオジロ，ヒヨドリ，ウグイス，ムクドリ，キジバト，モズなどがある。（兵庫県動物愛護協会調）季節の鳥も合せると，およそ50種近くが観察されている。

爬虫類では，須磨背山や多井畑，妙法寺，白川，高取山方面の山野に，少なくなったが，アオダイショウ，シマヘビ，カナヘビ，マムシなどが生息している。ニュータウンで鳥籠の小鳥がアオダイショウに襲われた例がある。

両生類は，多井畑，妙法寺，白川方面の川や田でツチガエル，トノサマガエルが，ため池では，ウシガエル，イモリがいる。珍しい例であるが，北須磨の湿地で，最近カスミサンショウウオがみつかっている。

魚類は，外来種が広域にシェアを拡大している。区内には約40ケ所のため池が散在しているが，殆んどは北須磨にある。妙法寺の獅子ケ池（32,000㎡），多井畑の畠山池（5,050㎡），皿池（5,000㎡），大池（4,500㎡），入角の池（3,400㎡），友が丘の向畑池（2,400㎡），白川の池の尻池（1,300㎡）などがある。

多井畑方面の池は，ガマなどの水辺植物，ヒシなどの水草がよく茂り，魚類もゆたかである。しかし，在来種のコイ，フナ，モロコは少なくなり，北米産のブラックバス，ブルーギルなどの外来種が人為的に池から池へ移動している。一部にはライギョが共存している。ため池は，ザリガニ，ウシガエルも加えて，外来種の天下になっている。一部の池には，ヒゴイが野生化している。なお，獅子ケ池は，いまでもモロコが生存しており，外来魚に犯されていない。

かつて伊川，白川の清流には，カワムツ，モツゴ，ギンブナ，ヨシノボリ，ドンコ，ナマズ，コイなどがいたとされている。また多井畑，白川などの畔などにはドジョウ，メダカが普通であった。

昆虫類では，珍しい種類が記録されている。獅子ケ池，白川の湿地にヒメヒカゲ，落合から東にかけての山野でハッチョウトンボがみつかっている。鉄拐山，鉢伏山の尾根から須磨浦公園にかけて，南方系のモンキアゲハ，谷筋にはアサギマダラなど蝶類が豊富である。区内の蝶類としては，約60種が確認されている。甲虫では，高取山，須磨アルプスのクヌギ林などで，カブトムシ，ミヤマクワガタ，ノコギリクワガタ，クワガタなどがいたが，稀になった。

梅雨があけると，市内至るところの庭木や街路樹は，クマゼミの声で埋まる。夕暮れどきの天井川上流の鎮座の滝，北白川のあたりではヒグラシ。高取山，須磨アルプスの山中にはアブラゼミ。渓間にはミンミンゼミ。盆が過ぎるとツクツクボウシが夏をしめくくる。蝉だけは，旺盛であるが，種類によっては，消長がある。ニイニイゼミは，減少しつつある。

(3) 植　物

須磨の背山は，地形としては急峻で変化に富んでいる。しかし，ウバメガシ，トベラ，クスノキ，ヤマモモなどの二次植生で覆われているところが多く，人工，自然林が混然一体となっている。植生の残っているところでは，鉢伏山（246m），旗振山（252m），鉄拐山（234m）などがある。林相は，マツ，ソヨゴ，ミズナラ，トベラ，コナラ，ヤマモモ，ウバメガシなどである。花崗岩質の鉢伏山は，ヤマツツジ，ミヤコツツジなどの酸性植物がみられる。一の谷川上流，赤旗谷，堺川あたりの谷には，コシダ，ベニシダが，岩の斜面にはシノブ，ときとしてウラジロの群落がみられる。

横尾，栂尾，須磨アルプスのあたりは，その名のとおり岩場がある。裸岩の痩せ尾根で，ソヨゴ，イヌツゲ，アラカシ，コナラなどがある。須磨女子高校北の山中にはニセアカシアの大樹が多い。鎮座の滝は，須磨離宮公園横の谷川を溯ること10分あまり，まちの近くとは思えない幽邃境である。天井川の上流で清水がこんこんと涌いている。このあたりシダの群落がある。ベニシダ，ウラジロ，オニカナワラビ，トウゴクシダ，オオイタチシダ，イノデ，コモチシダ，ホラシノブなどがみられる。

多井畑，奥須磨公園のあたりは，なつかしい農村風景が残っている。

高取山（312m）頂上は，須磨区と長田区の境である。西斜面は主として裸岩の尾根で，風化し乾燥している。萩の寺や横谷川などの山麓の谷間には，常緑樹やシダ類がゆたかである。

白川の伊川，白川の支流あたりは，自然がむかしのままに息づいている。

市内の珍しい植物分布としては，鉄道構内に逸出したアジアンタム，線路ぎわのイヌトクサの群生，須磨寺の池のオオフサモなどがある。

なお次表は，地質時代の化石種と現世の自然林のようす更には現在植栽が進められている公園樹・街路樹の状況をちなみに比較したものである。

歴史と文化

須磨鉢伏山などで，縄文時代のものとみられる石器が発見されたことは，前述のとおりである。その材料はサヌカイトであった。サヌカイトは，地質時代に第一瀬戸内海が次第に陸地に移行するとき，火山活動に原因して生じたものである。

これらの安山岩は，屋島，讃岐にかけて広く分布する

地質時代と現世との植物相の概念（須磨の林野）

分類（科）	化石植物（新生代第三紀）	現世	
		自生種	植栽種（公園，街路など）
イチョウ			イチョウ
マツ	トガサワラ（近似種以下同）	マツ	ダイオウマツ
スギ	ランダイスギ，スギ，メタセコイア，セコイア		ヒマラヤスギ，ラクウショウ，メタセコイア
ヒノキ		ネズミサシ	イブキ
ヤナギ	ポプラ		ヤナギ，カロリナポプラ
ヤマモモ	コンプトニア	ヤマモモ	ヤマモモ
クルミ	サワグルミ		
カバノキ	コウベヤシャブシ，アサダ	オオバヤシヤブシ	
ブナ	ツクバネガシ，シナグリ，ムカシブナ，クヌギ，ホワイトオークガシ，ホソバシラカシ	アベマキ，クヌギ，コナラ，ウバメガシ，アラカシ，ミズナラ，クリ	マテバシイ，ウバメガシ
ニレ	エノキ，ニレ，ムカシケヤキ	エノキ	ケヤキ
モクレン		サネカズラ	ユリノキ，ホホノキ，タイサンボク，コブシ，モクレン，ハクモクレン
クスノキ	クスノキ，シロモジ，ウコンバナ	クスノキ，ヤブニッケイ，アオガシ，カゴノキ	クスノキ
マンサク	コウベトサミズキ，マンサク，チュウシンフウ		
スズカケノキ			プラタナス
バラ	サンザシ		ヒガシザクラ，ソメイヨシノ
マメ		ニセアカシア，クズ，ヤマハギ，サルトリイバラ	ネムノキ
トウダイグサ	アカメガシワ，シラキ	アカメガシワ，ヒメユズリハ	ナンキンハゼ
ウルシ		ハゼノキ	
モチノキ		クロガネモチ，ソヨゴ，イヌツゲ	
ニシキギ		テイカカズラ	
ミツバウツギ		ゴンズイ	
カエデ	イロハモミジ		トウカエデ，イタヤカエデ
トチノキ			トチノキ，マロニエ
シナノキ	シナノキ		
ツバキ		ヤブツバキ	サルスベリ
キブシ		キブシ	
ウコギ		カクレミノ，タラノキ	
ツツジ		ヤマツツジ，モチツツジ	
カキノキ	ムカシカキ	ネジキ，コバノミツバツツジ	
モクセイ	ハシドイ	コバノトネリコ，ネズミモチ	
ヤシ	シュロ，ビロウ		
マックントキア	マックントキア		
ユキノシタ	アジサイ		アジサイ
ノウゼンカズラ	キササゲ，キリ		
オオギリ	ヌマミズキ		

もので，縄文時代の生活文化が互に関係していたことを示している。

弥生時代に入って，大和地方の遺跡から炭化米や籾の圧痕などが出土している。すでにこの頃には，稲作技術が大陸から伝来していた。定住生活が確立して，集落の規模も拡大していた。

須磨には，大手山麓，潮見台，鉢伏山麓，牛塚，得能山など3世紀以降の古墳の存在が知られている。

7世紀に入って，全国は大和政権下に統一された。その律令下で，須磨は摂津国の西端に位置し，その文化の影響を受けた。

西に伸びた六甲山系は，須磨浦で急に海に迫る。絶壁で，砂浜は狭く，海峡の流れが速い。当時としては，海陸ともに交通の難所であったであろう。摂津国と播磨国の国境もここにあった。いま史蹟境川の石柱が立っている。須磨の地名も一説には摂津国のスミということに由来するという。7世紀の終りにはこのような立地の要衝から，ここに須磨関所があった。松林のなかに，わずかに漁師の家が点在していたと想像される。

松籟さびしく，都人の隠棲の地であり，王朝貴人の流謫の地であった。万葉集等が当時の風物を伝えている。源氏物語のいくつかの場面は，この地を舞台に展開された。

1184年2月の明け方，戦史に残る一の谷合戦が義経の奇襲をもって切って落とされた。淋しい風光の地は阿鼻叫喚の巷と化した。その落日の思想は，平家物語に，源平盛衰記に記述され，謡曲に歌舞伎に語り継がれた。盛者必衰の調べは，この地の一弦琴に伝えられている。

源平800年，この年須磨寺で朱色鮮やかな三重塔が再建され，また敦盛塚遠忌法要も行われた。

この地は古来，文人墨客の好んで訪れる地となる。芭蕉，子規，虚子に詠まれ，残照の美しい地である。

旧市街には，いまも110あまりの社寺仏閣がある。月見山から須磨寺，須磨浦にかけては，大正時代から関西在住の富豪の別邸のあったところ。いまも一部屋敷林が残っていて，夏の日など蝉しぐれに明け暮れる。

一の谷には，異人館があった。モルガンお雪もここで世を避けていたことがある。

むかしのノスタルジアを感じさせる地域である。

須磨離宮公園は，旧市域のほぼ中央に位置していて，毎年5月須磨音楽の森の祭がここで行われる。ここはシルクロード探検で有名な大谷光瑞伯の別荘であったが，大正初めに武庫離宮として造営され，昭和42年には市民公園として開園された。旧庭園とヨーロッパ風の噴水公園がよくマッチしており，広大な園内の回遊道は，また自然観察園的な性格をもっている。

妙法寺川公園は，川に沿って見事な桜のトンネルで，新しい名所になっている。また植栽されたケヤキ，クス，アラガシ，シラカシ，ハゼ，シイノキ，ヤナギなども林の趣きをもってきた。市内を縦貫するグリーンベルトである。

かつての白砂青松の須磨海岸は，いまは海洋レクリエーションゾーンになった。須磨港から千森川間は，大規模な養浜事業によって，砂浜がはるか沖まで拡げられた。最近この砂浜で大量のアサリが発生したり，海ガメがみつかったりして話題になった。海浜公園，遊歩道，サイクリングセンター，ヨットハーバーなどの施設も整備されて，フランスのニースと比肩される。夏は阪神間唯一の海水浴場で，若者たちのフリーステージとなっている。この夏は98万人の人出で賑わった。

須磨水族館は，隣接地に新しい館が建設されている。62年度には，国際的な水族館として，500種，20,000点の魚類を飼育する施設となる。波の大水槽における海洋の再現。映像，音響などを駆使した魚類の生態がダイナミックに展開される。

須磨浦公園は，むかしの松林の面影をとどめている。むかしながらの松籟が梢をわたる。マツクイムシの被害もここには及ばない。

須磨の浦波は，磯づり公園と赤いコンベアが幾何学模様を描いている。このあたり潮の流れが速く，日本でも有数ののりの産地である。

おわりに

須磨の台地は，数々の歴史を秘めながら大きく変った。眩むばかりである。

いま，環境保護から環境創造の時代を迎えたといえよう。

自然や野生をいつくしみ，保護するとともに，それらと新しい生活環境との共存が必要となっている。

私たちのまわりには，種々の環境エレメントがある。動植物，大気，空間，水辺，田園，史跡，文化的建造物など。これらはそれぞれが無縁ではない。お互に機能しながら，調和が図られなければならない。

新しいまちのなかにも緑がゆったりととけこんでいる。窓辺の緑化，住空間のなかに植栽されたけやきなど，そこには小さいながら季節があり，憩いがある。メイン道路に整然と立ち並ぶユリノキは大樹に育っている。繁みで鳥たちのさえずりも聞かれる。

ユニバーシアードの開催された地には，コスモスの丘がある。いまも当時と同じように咲きみだれていて，はるかなロマンを感じさせる。コスモスは，今年，須磨のシンボルフラワーに選定された。家庭のちょっとした空間や，幹線道路の法面などこの花で埋められようとしている。

創造された環境のなかにも，いずれ二次生態系が形成されていくだろう。

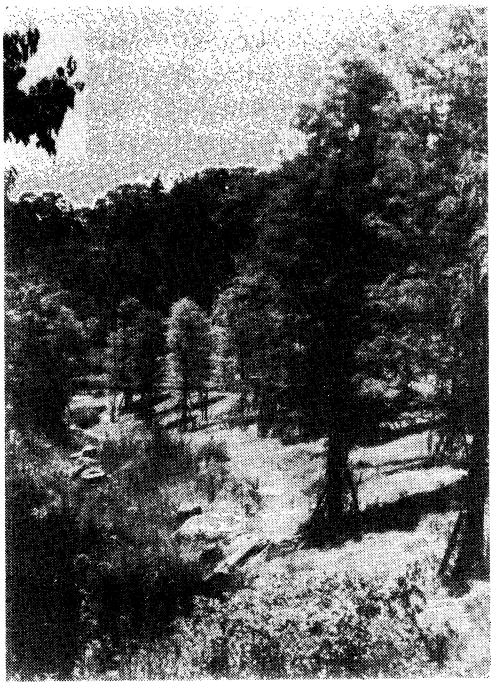
果てしなく拡がる白亜のまち，そして緑と海が薫るむかしのまちも共存していて，なお脈々と流れる伝統文化がある。開けていくなかにも，どこからともなく大地の鼓動が聞こえ，背山では生物たちの息吹にふれ，そしてどこかにまだ未知の発見が残っていそうな気がする。須磨はそのようなまちである。

須磨区政にかかわる者として，その自然と歴史と文化に思いを馳せてみた。

参考文献

須磨神戸市編入50周年記念行事協賛会	1971	須　　磨
室　井　　綽	1974	公害・兵庫県の生物
白岩卓己，藤岡　昇，三木　進，山崎幸雄	1977	須磨アルプス（自然をたずねて）
堀　　治三朗	1982	神戸の植物化石
室　井　　綽	1962	兵庫生物ハイキング
室井綽，清水美重子編	1982	六甲の自然
藤　本　義　昭	1985～	神戸の植物
白　岩　卓　己	1980	神戸のしだ
岡村はた，橋本光政，室井　綽	1982	植物観察事典
田　辺　真　人	1984	須磨歴史小事典

鉄拐山から須磨海岸を望む



奥須磨公園におけるラクウショウの林